

復興に向かって ～看護の力

第1回

南三陸病院（宮城県南三陸町）

2011年の東日本大震災から、ことし3月で丸5年になります。今月号から3回にわたり、被災地の現在の状況や、これまで現地で懸命に活動を続けてきた看護職の姿をご紹介します。



宮城県北東部に位置する南三陸町。津波で甚大な被害を受けた公立津川病院は、病床機能を隣接する登米市に移し、診療機能を同町に開設された公立南三陸診療所が担ってきた。昨年12月、ようやくそれらが再編され「南三陸病院」として開院した。

35キロメートル離れた病院と診療所、双方の看護部長として奮闘してきた星愛子さんは「自ら考え、動いてきたスタッフの使命感が当院の宝。新病院でも、それぞれの責任を果たしていくことが大切です」と職員をねぎらいながら、今後を見据える。

顔の見える“地域連携”へ

震災は、人々の暮らしを大きく変えた。仮設住宅の入居者が数年たって体調を崩すケースや、アルコール依存症の住民が繰り返し受診するなどの事例が増えた。慢性疾患を抱えた高齢者も多い。星さんらは、地域医療の砦（とりで）である病院・診療所を支えながら、月に一度はテレビ会議システムを使って、地域包括支援センターや保健センターとこうした事例の検討や

情報共有を行ってきた。町の保健師とも避難所での活動を通じて信頼関係を築いている。

副看護部長の高橋り子さんは「入院機能は登米市の病院、外来は診療所へとなり、組織間で顔の見える関係づくりを意識するようになりました」と語る。入院患者の退院調整では丁寧なフォローを心掛け、看護師や主治医が、町の訪問医や社会福祉士、ケアマネジャーなどとつながり「ご家族が安心できるよう、皆が力を注いでいるのが当院の強み」と言えるまでになった。

震災後、病棟から訪問看護ステーションに異動した三浦純子さんは「はじめは何ができるか不安だった」と言うが、「患者さんが地域に戻るときには、ご家族の介護力を見極めるのがポイント」と、今では一人一人の暮らしに寄り添う頼もしい調整役になっている。

支援を糧に新たな仕組みを築く

震災では、レセプトやカルテなどのデータや書類も流失した。看護部のスタッフはわずかに残った古いマニュアルを手直しし、研修に出て新しい手順書を作成した。教育・ラダーシステムも、主任など中堅メンバーが委員会の中心となって内容を再編。動画を活用した、現場になじみやすい新人教育プログラムができた。

感染対策委員会では、委員が外部の講習に参加し、イラスト入りの手順書やチェックリストを用意。これらを「ベストプラクティス」として、普及に努めている。「震災までは専門性を意識する機会が少なかった」と話す委員の山内ひとみさん。しかし「手順が明文化すれば業務にも自信が持てる」と、全国から支援に来た医療職に相談しながら手順書を完成させ、院



学術集会の参加支援事業の一環として自らの実践を語る齋藤さん

内の指導役を務めるまでになった。

星さんの方針もあり、同院では自らの体験を学会で報告する機会を設けている。三浦さんや山内さんのほか、助産師の齋藤恵美さんも、昨年11月、富山県で開催された日本看護学会学術集会（ヘルスプロモーション領域）に参加。本会が被災地の看護職を対象に行う学術集会参加支援事業の一環として、これまでの実践を発表した。「震災は本当につらい体験でしたが、多くの方に支えられた。そうした方に現状を報告するのも責務ではないかと感じました」と振り返る。当日は多くの看護職と交流を深め、新たな学びを得た。星さんは「いま、当院は世代交代の時期。無我夢中の状況から、若いスタッフたちが自ら院内の仕組みを作り上げていくという姿勢が見えてきました」と語る。

同院の今後の課題は、地域連携や退院調整の充実だ。新病院は、町の保健・福祉を担う総合ケアセンターと一体型の建物。震災を経て強くなった行政や他機関とのつながりの下、人々の健康や暮らしを支える役割を担う。新しい“町の顔”を支える星さんらに、大きな期待がかかる。